

『今すぐ始めよう! 事業承継ブック ~親子間の話し合いのきっかけに~』で、事業承継の流れを確認する。「青壮年部の仲間は、経営にたいする意識が高い。青壮年部でも、事業承継に取り組む足がかりをつつていきたい」と純也さんは言う



JA全農のHPで事業承継ブックを公開中!



顔なじみのTACにはなんでも相談できる



イラストは、JA全農TAC推進課と地上編集部によるコラボキャラクター「TACマン」

### JA岡山

米や麦に加え、モモやブドウといった果樹栽培が盛んに行われている。現在、7人のTACがそれぞれ月に40軒の担い手農家を訪問している。岡山市の北部で温室栽培される「足守メロン」は、きめ細やかな果肉と高い糖度が特徴で、地域を代表する産物の一つ。

ハウス10棟(約30a)でメロンを生産する板野家。「この地域のメロン農家は減り続けている。やめてしまう人の施設を引き受けるなど、『足守メロン』を守り、次の世代につなげていきたい」と、将来を見ずえる純也さん



# 後継者対策の足がかりをTACが築く

岡山県 JA岡山

事業承継が進まなければ、後継者も育たない。喫緊の課題となるなか、TAC(地域農業の担い手)に出向くJA担当者(は、勉強会を開催するなど、JA青年組織とも連携し、対策を講じ始めている。

阪本博文 写真 Photo by Hakubun Sakamoto JA全農TAC推進課 企画協力



どんな経営にしていきたいんだ

まずは今の経営をしっかりと守りたいね



「将来的には規模拡大や法人化など多くの選択肢が出てくると思うが、息子の行く道を応援したい」と話す和人さん(写真左)

### アクションを起こせ!

木梨さんは担い手農家の声をくみ取り、七月下旬、JA岡山青壮年部の部長を務める板野純也さん(34)のお宅を訪ねた。純也さんは、父の和人さん(61)、母の眞理枝さん(59)、妻の陽規さん(38)とともに、四月〜二月は温室でブランドメロン「足守メロン」を、一〇〜翌四月は花束などに使われるプブレラムを生産している。事業承継を控える純也さんが就農したのは、二四歳のとき。サラリーマンをしていたが、祖父がつらそうに農作業をする姿を見て、助けたかったという。「栽培に加え、販売などの経営面も把握できてきた。青壮年部の仲間からは、『親との話し合いができず、事業承継どころではない』との声も聞くが、うちはいっしょに食卓を囲んでいるし、なんでも話せている。事業承継に向けては、相続のことなど、具体的な流れを知りたい」と和人さんも、もともとは一〇年ほどサラリーマンをしていた。六軒の農家で共同経営していた

農業と同じく、高齢化の波が訪れている中小企業業界では、すでに事業承継が重要課題として認識されている。一方の農業界では、なかなか浸透していない。こうしたなか、いち早く課題として捉えたのが、JA岡山県青壮年部協議会だ。二〇一七年度のポリシープックに、後継者対策としてJA青壮年部で事業承継に取り組むことを明記。すると、「なにから手をつけるべきなのか」「手遅れにならないためには、いつごろからバトンタッチすればいいんだ」と、部員の意識にも変化が現れてきたという。「担い手農家からは相続や農地の問題など、相談にのってほしいとの声が出ています」JA岡山のTACで青壮年部の事務局を担当する木梨竜策さんも、ニーズの高まりを感じていると話す。

大型のメロン団地を、それぞれの農家の個人経営に移行するタイミングで就農。以降、眞理枝さんと共に、経営を支えてきた。「おれのときは時代が違うから、どの機関にどの書類を提出すればいいのかを知りたい。TACが資産管理の部門と連携し、手助けしてくれると助かるね。いつも顔を合わせているTACなら信頼できるし」話を聞き、木梨さんは事業承継の重要性を実感したという。「青壮年部で疑問や不安をぶつけ合うなど、なにかアクションを起こせるといいですね」九月一日には、JA岡山県青壮年部協議会の主催で事業承継の研修会を開催。親子間の悩みを持つ部員がたくさんおり、「親子での話し合いの重要性を、親父を亡くした後に痛感した」と話す部員もいた。同協議会の高原弘雅会長は、「事業承継にはJAの総合力が必要で、創造的な自己改革にもつながる。ポリシープックで具現化し、JAと一体となって取り組みたい」と、JAへの期待を高める。